

氏 名	あすか い まさ とも 飛 鳥 井 雅 友
学位(専攻分野)	博 士 (文 学)
学位記番号	文 博 第 83 号
学位授与の日付	平 成 9 年 3 月 24 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研究科・専攻	文 学 研 究 科 ド イ ツ 語 学 ド イ ツ 文 学 専 攻
学位論文題目	ゴットフリート・ベンにおける抒情的自我の概念について

論文調査委員 (主 査) 教 授 山 口 知 三 教 授 吉 田 城 助教授 松 村 朋 彦

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、20世紀ドイツを代表する詩人の一人ゴットフリート・ベン（Gottfried Benn 1886—1956）の詩論と詩作との生涯を通じての変遷のあり様を、彼の唱える「抒情的自我（das lyrische Ich）」という概念を手がかりとして解明するものである。全体は五章から成っている。

第1章では、まず「抒情的自我」という概念が20世紀ドイツの抒情詩をめぐる議論において、いかに各人各様の解釈にもとづいて多義的に用いられてきたかが、M. ズースマン、O. ヴァルツェル、K. ハンブルガー、K. ベスタロッツ、E. M. リューダースなどの所説を例にして概観される。次に、ベンにおける「抒情的自我」の問題を論じるさいのさまざまな研究者や批評家によるこの概念の捉え方の多様性がE. M. リューダース、U. マイスター、K. クローロウらを例にして提示される。そのうえで、ベン自身が「抒情的自我」という言葉を用いて詩論を展開している文章を具体的に特定する作業がなされ、そのような文章の数は意外に少ないものの、それぞれの評論や講演の構成や成立事情などを詳細に検討すると、実質的にはこれら数編の文章によってベンの半世紀にわたる文学活動のはほぼ全時期が覆われていることが明らかにされる。そして、第1章のしめくくりとして、ベンの「抒情的自我」という言葉の最初の使用は、彼が最初期の創作活動の行きづまりを自覚し、いったんは一種の断筆宣言をしながら、まもなくあらためて詩作活動を再開したと密接に関わっていたことが指摘される。これによって、以下の考察がまずベンの初期の作品群の分析から始められねばならない必然性が示されるわけである。

第2章は、ベンの最初期の作品である「レネ小説群」と「モルグ（死体公示所）連作詩」の分析から始まる。前者においては、世界を有意味な価値体系や連関性をもったものとしては捉えることのできなくなってしまった青年医師の現実喪失感と、社会からの疎外感が問題となっていることが確認され、後者に関しては、「美しい青春」と「レクイエム」という2編の詩を具体例として、その素材の選択の特異性から用語法の特徴にいたるまでが丹念に分析され、「モルグ連作詩」が伝統的な人間観や美意識に対してもつ徹底した破壊性と、にもかかわらずその背後に潜むベンの伝統的価値観に寄せる屈折した執着が摘出され

る。しかし、「モルグ連作詩」はあくまでベンの出発点であったにすぎず、これ以後のベンの特作には、それぞれに作風の異なったさまざまな傾向の並存が見られる。ここでは、それらの中から「歌」、「コカイン」、「カリュアティーデ」など数編の詩を例示し、これらの詩の分析を介して、この時期のベンの特作に顕著に現われている近代ヨーロッパからの脱出願望、自我解体による脳髄支配からの脱却願望、ディオニュソスの陶醉願望などが検討される。そのうえで、このさまざまな作風の並存状態という試行錯誤の後に、1921年に「エピローグ」と題する評論の中で一種の断筆宣言がなされていることが確認される。

第3章では、まずベンが「抒情的自我」という言葉を初めて用いた1927年の評論「抒情的自我」の内容が検討される。そこで語られている「抒情的自我」なるものは、合理的知性とは対極にあるものであり、「個々の知覚へと分化する以前の動物的感觉器官ともいふべき一種の繊毛」によって集めた言葉の助けを借りて、神話的原初状態への、人間存在の無意識的基層への退行を実現するものである。そしてベンは、合理性の追求が極限までおしすすめられた結果、全ての体系と構造が疲弊し弛緩してしまった今こそ、徹底した自我解体をおしすすめて原初への退行を実現する好機であるとして、「抒情的自我」の現代的意義を説くのである。このように「抒情的自我」が、個としての近代人の表層的自我の解体の徹底化の果てに求められるものである以上、それは、ベンのものであったことがここで確認される。そのうえで、この「抒情的自我」なるものと、ベンにおいては超越的実在性をもつものとされる言葉との錯綜した関係が考察される。その後さらに、ベンは1920年代末から精力的にさまざまな人間論や文明論などの評論を発表するようになり、それらの中でも、近代人の合理性万能の考え方を厳しく批判し、表層的自我の徹底的解体による、より始源的、太古的基層への回帰を希求していることが、1930年の評論「人格の構造」や「詩的なものの問題性について」などの分析作業を介して明らかにされる。

第4章では、最初に、あらためて1920年代のベンの特作の検討がおこなわれる。ベンの特作のほとんどは1詩節4行もしくは8行で交差韻を基本とする定型詩であって、1910年代のさまざまな作風の並立あるいは乱立状態から、安定した一つの詩風が確立されていったと言えるが、ここでは、ベン自身によって1921年の断筆宣言以後に再開された新たな詩作活動の綱領的作品と位置づけられている詩「歌人」などを分析することによって、この時期の特作と1927年の「抒情的自我」論との照応性と不一致とが指摘される。その後で、今度は1931年の「ハインリヒ・マン講演」や翌年の評論「ニヒリズムとその克服」などで鮮明に打ち出されるにいたったベンの特作の一種の「芸術形而上学」が問題にされる。すなわち、ベンはこの講演や評論においては、それまでの陶醉による始源への復帰よりも、その「陶醉」に「形式」を付与する「規律」の方を重視するようになるのである。そして第4章の後半では、このような芸術観をもつにいたったベンが、ナチスの政権獲得後まもない1934年に書いた自叙伝「ある主知主義者の生涯」のさまざまな問題性を摘出する形で、ベンにおける「抒情的自我」の定義の微妙な変化や揺れが論じられる。第5章では、ベンの特作の二つの講演「抒情詩の諸問題」と「クノッケ講演」において「抒情的自我」という言葉がどのように用いられているかが分析される。すなわち、これらの講演においては、「抒情的自我」は、一方ではかなり漠然と「言葉を集めて詩を作る作業一般」を表す概念としてほとんど抒情詩人の同義語同然に用いられているかと思えば、他方では抒情詩人内部で、ひいてはベン自身の内部

で、詩的な言葉を集めることに従事する自我の一部分機能にすぎないものという、かなり限定された意味で用いられていることが明らかにされる。つまるところ、ベン「抒情的自我」なる概念はきわめて多義的なものであって、その実体に迫ろうと思えば、ベン「その時々」の用法を忠実にたどって、その時々「の彼の詩論と詩作の内実を解明していくほかないということになる。

論文審査の結果の要旨

1950年代の西ドイツで見られたいささか異様なほどのベン賛美の影響で、その後かなりの期間は、西ドイツはもとより、日本のゲルマニストたちの間でもゴットフリート・ベン（1886—1956）を論ずることは、一種の流行であったと言っても過言ではない。1950年代の西ドイツにおけるベン「人気が、いったんはナチスを支持しながら、やがてナチスに疎まれて文筆活動を禁じられ、さらに戦後は占領軍によって発禁処分を受けるというベンの特異な経歴と、ナチス支配から敗戦をへて東西分断という激動の歴史に翻弄されたドイツ国民の幾重にも屈折した感情との共鳴という特殊な条件に強く規定されたものであったことは否定しようのないところであろう。しかし、今世紀初頭の芸術革新運動であった表現主義運動を代表する詩人として出発し、上述のように歴史の激動の波に揉まれながらも、芸術の、と言うよりも、抒情詩の価値と意義によせる信奉をいささかも揺るがされることなく、生涯を通じて詩作に励んだベン「の業績は、20世紀のドイツ文学を考えるうえで忘れてはならないものであり、一時の流行的な関心の余波もすっかり静まった今こそ、あらためてベン「の文学的営為を実証的に検討し直し、その全体像を正確に捉え直すことが必要である。

「抒情的自我（das lyrische Ich）」という言葉「をキー・ワードとして用いることによって、半世紀におよぶベン「の多岐にわたる文学活動全般を一つの統一的視点から捉えようと試みた本論文は、その意味で、きわめて有意義な研究論文である。特に、わが国には、ベン「の文学活動全体を統一的に捉え、かつ個々の作品に丹念な分析をほどこした本格的なベン「研究書はいまだ存在しないだけに、本論文「のもつ意義は大きいと言わねばならない。

本論文「の優れている点は、次の諸点にある。

1) 「抒情的自我」 という概念を中心にしてベン「の詩論を整理し、その観点にもとづいてベン「の詩作品を考察するという研究は、これまでも行われてきたが、「抒情的自我」をめぐるベン「自身の発言がどちらかといえば彼の後半生に偏っていたこともあって、このテーマに関する研究は、どうしても彼の後期の評論や詩作品を主たる対象とし、「抒情的自我」 という概念もなにか固定した内容をもつものとして抽出しようとする傾向が強かった。これに対して本論文は、ベン「におけるこの概念の曖昧さや多義性、さまざまな時期における揺れといったものに着目し、初期から晩年にいたるベン「の実作と詩論の変遷の過程を丹念に跡づけることによって、ベン「の「抒情的自我」論を彼の詩作活動のそれぞれの局面のなかに位置づけることに成功している。

2) 「抒情的自我」論を内包するベン「の評論や講演の類は、そのほとんど全てが多く「の自己引用を含む複雑で多層的な構造をもっているが、論者はこれを綿密に読みとき、そこに含まれている矛盾や多義性を鋭くえぐり出すことによって、ベン「の詩論「がはらんでいるさまざまな問題点をかなり具体的な形で提示し

ている。

3) 本論文の特色はベンの詩論と正面から取り組みながらも、決して抽象的議論に偏することなく、ベンのさまざまな時期の、さまざまな作風の詩作品の入念な分析や解釈による裏付け作業を並行しておこなっている点にあるが、個々の詩の分析にあたって、語彙、イメージ、モチーフ、宗教的背景、韻律、詩型など、きわめて多面的な目配りを行き届かせ、また適宜多くの研究文献を参照して、説得力のある作品解釈をおこない、示唆に富む見解を随所で提示している。

とはいえ、むろん、本論文にも欠点がないわけではない。第一に、初期および中期のベンについては、詳細で説得力のある分析がなされているのに対して、後期のベンに関する論述が不十分である。これは、先述のように「抒情的自我」をテーマとするベン研究がとかく後期に偏りがちだったことに対する論者の自覚的姿勢の現われともいえるが、それにしても、論者なりの視点から、後期のベンの詩作についてももっと踏み込んだ入念な論述が必要であろう。また、論者は、ベンの詩論を純粹に文学論の問題として扱いたいがために、ナチズムを初めとする同時代の政治的・社会的問題とベンとの関わりを考察の外に意識的に排除しているようだが、すくなくとも1930年代のベンの詩論をそのような姿勢で十分に把握し評価することができるか疑問が残るところである。さらに、ベンの文章の翻訳不可能性はよく言われるところではあるが、引用文の訳にもう一工夫望まれる箇所が散見される。これらの欠点を克服して、論者によるいちだんと包括的なベン研究の完成が期待されるところである。

以上審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。1997年2月28日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。